

HOSOO GALLERY

“Ambient Weaving—環境と織物” 展 開催

株式会社 細尾（京都市中京区）が運営する『HOSOO GALLERY』にて「Ambient Weaving—環境と織物」展が開催スタートいたしました。

“Ambient Weaving”とは、「環境情報を表現する織物」「環境そのものが織り込まれた織物」を指します。歴史を振り返ってみれば、織物とは自然原料からつくられることが基本でした。織物の歴史とは「環境をいかに身体に纏うか」という問題への回答の歴史だったとも言えます。織物とは、人と環境の間に介在するメディアです。織物自体に、環境が様々なかたちで取り入れられてきました。植物繊維や動物繊維といった自然環境の素材による糸を織物に用いるだけでなく、いわゆる「草木染め」のように植物によって織物を染色するほか、こと日本においては、織物にモチーフとして四季の植物や水の風景が描かれたり、複数の色を組み合わせることで四季折々の自然の風物を表象する襲色目が重視されてきました。

株式会社 細尾は、2020年より東京大学大学院情報学環 寛康明研究室（東京都文京区）、株式会社ZOZOテクノロジー（千葉県千葉市）とともに、伝統工芸と先端テクノロジーを組み合わせた機能性と美を両立する、新たなテキスタイルの共同研究開発を行ってきました。昨今加速するテキスタイルの機能面での進化に加えて、意匠面の革新に目を向け、テキスタイルのもたらす機能に対して意匠を両立させること、そして新しい機能を用いることで可能になる意匠の開拓に挑戦しています。本展はその共同研究開発の成果展示となります。

現代の我々にとって、もはや手付かずの自然は身近ではなく、むしろ人工的に形成されてきた環境のなかでの生活が当たり前となっています。「人新世」と言われ、しばしば「自然」という概念そのものの見直しが議論される現代において、環境と織物の新しい姿とはどのようなものなのか。本展示 “Ambient Weaving — 環境と織物” は、こうした問いを据え、歴史的考察を踏まえながら、伝統技法と先端テクノロジーを掛け合わせることで、織物の機能と意匠を両立した新たな表現や体験の拡張を試み、現代における人間と環境と織物のあり方を提示しています。

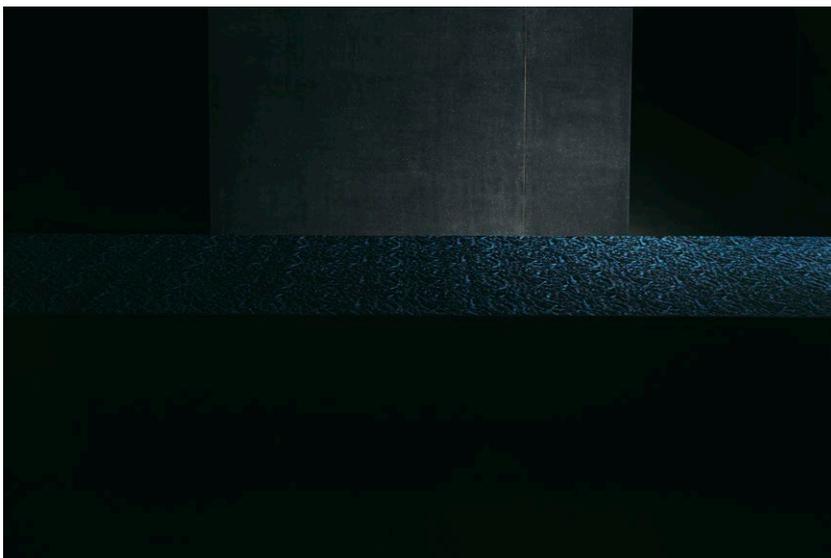




西陣織は、1200年の長きにわたり美を追い求め、常に最先端の技術を取り込みながら発展してきました。本展では、東京大学寛康明研究室、ZOZOテクノロジーズが開発してきた先端素材やデバイスを、西陣織特有の構造や意匠を持つ細尾のテキスタイルに織り込むことで、周囲の環境情報を可視化しています。

作品例：

Wave of Warmth



この作品は、温度変化を色によって可視化しています。特定の温度に達すると変色するように調合されたロイコ染料を紙に塗布し、西陣織でよく用いられる「箔」と同じ要領で裁断された糸を繊維として織り込んでいます。繊維が織り込まれたHOSOOのシグネチャーテキスタイルでもある「Wave」は、立体的な波の動きのように様相を変え、25度以上になると青色に発色し、温度が下がると黒色へと戻っていきます。この可変的な染めの技法を通して、現代特有の室温が管理された屋内における温度環境の変化へと人々の意識を開きます。

Drifting Colors



クロマトグラフィーというロシアの植物学者ミハイル・ツヴェットが発明した物質を分離する技法を応用した織物。本来、染色とは糸に染料を吸収させ、定着させることを指しますが、この作品では、それぞれの染料の電荷・質量・疎水性の差により、異なる時間で糸の中を染料が移動します。湿度や水分量を適正に保つことで、この分離と移動が起こり、染料が糸へ浸透した後も動的に色が変わり続ける様子が見られます。

Memories of Flow



紫外線をあてると硬化するUV硬化材をチューブに入れ、チューブごと緯糸として織り込んだ作品。織物を紫外線に晒すと数秒で硬化し、形が定着します。この作品では、織物を水が滞留する水槽内に入れ紫外線で硬化させることで、水の流れを織物に写し取っています。HOSOのテキスタイルコレクション「Stone」を用い、石が水流により長い年月をかけて形づくられていく様子を想わせます。

Woven Clouds/Woven Glow



「Woven Clouds」は、PDLC(高分子分散型液晶)を箔状に裁断し、緯糸として織り込んだ作品。不透明な白色をした織物が、電圧をかけると液晶分子が電界方向に揃って配列した状態となり光を透過させ、光の透過不透過が可変できるようになっています。

「Woven Glow」は、電圧をかけると有機物が発光する有機ELと呼ばれる現象を利用した素材を箔状に裁断し、緯糸として織り込む事により生地自体が発光します。

この2作品は、作品周辺の光量をセンシングし、PDLCの透過性やELの発光具合に変化し、反映しています。触れることのできない光を織り込むと同時に、日光による時間の流れを表します。

< 展覧会概要 >

「Ambient Weaving ― 環境と織物」

会期：2021年4月17日(土)–2021年7月18日(日)

会場：HOSOO GALLERY 京都市中京区柿本町412

電話：075-221-8888

開館時間：10:30–18:00(祝日を除く、入場は閉館の15分前まで)

入場料：無料 www.hosoogallery.jp



< HOSOOについて >

『細尾』は元禄年間(1688年)、京都西陣において大寺院御用達の織屋として創業しました。京都の先染め織物である西陣織は1200年前より貴族をはじめ、武士階級、さらには裕福な町人達の圧倒的な支持を受けて育まれてきました。『細尾』は今、「帯」や「きもの」といった伝統的な西陣織の技術を継承しながら、革新的な技術とタイムレスなデザイン感性を加えることによって、唯一無二のテキスタイルを生み出し、国内外のラグジュアリーマーケットに向けて展開しています。
www.hosoo.co.jp

